

ふるさと 甚目寺

－「かかわる、つたえる、つながる」学習や活動を重視するE S Dの取組－

1 はじめに

E S Dは、「持続可能な社会の担い手をはぐくむ教育」といえる。日本ユネスコ国内委員会はE S Dの必要性や概念について、「今、世界には、環境、貧困、人権、平和、開発など様々な問題がある。これらの現代社会の課題を自らの問題としてとらえ、身近なところから取り組むことにより、それらの課題の解決につながる新たな価値観や行動を生み出すこと、そして、持続可能な社会を創造していくことを目指す学習や活動である」と示している。

本校の周りには、飛鳥時代に創建された甚目寺観音をはじめとする歴史的・文化的・伝統的な遺産が数多く存在する。この地域を「ふるさと甚目寺」として持続発展させていくために、本校では子どもの実態をふまえ、E S Dの大切にしている「価値観」「育みたい能力・態度」「学びの方法」を基本的な視点として、自分たちがこの地域で大切にしたいものに目を向け、人や地域にかかわり、人から人へ伝え、人や地域とつながることが必要だと考えた。

2 研究仮説

この「ふるさと甚目寺」から学習活動として展開するために、以下のような仮説を設定した。

地域に内在する現代社会の課題を自らの問題としてとらえて、E S Dの考え方を取り入れ、活動を重視した生活科・総合的な学習の時間をおこなうならば、人や地域に積極的にかかわろう、つたえよう、つながろうとする子どもをはぐくむことができるだろう。

3 仮説検証の手立て

(1) E S Dの考え方、視点で授業づくりを見直す。

これは、あま市立甚目寺小学校E S D研究部で決めた5つの考え方である。

- ア 五感を働かせることができる体験を行う。
- イ 子どもの主体性を尊重し、個々の発見・気付きを大切にする。
- ウ 子どもたちが、発見したり気付いたりしたことを表現する機会を設定する。

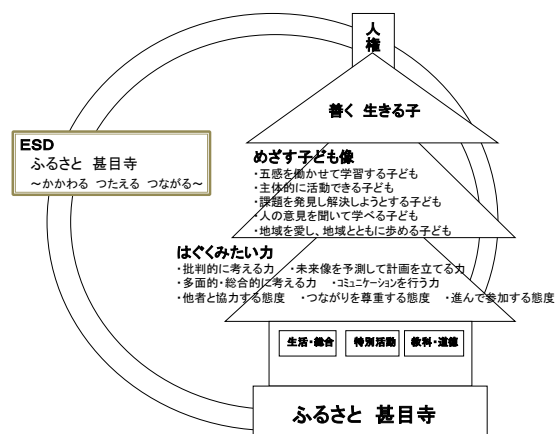
エ 地域の様々な立場、世代の人たちと学ぶ。

オ 地域の人や自分たちが、この地域で残したいもの、守りたいものに目を向ける。

(2) 生活科・総合的な学習の時間の内容の決定

各学年の活動キーワード、1・2年「地域」、3年「福祉」、4年「環境」、5年「産業」、6年「歴史・文化」に基づいたテーマ、活動内容を決定する。

(3) 研究構想図



3 研究の実際

(1) 第2学年の実践「この町大すき ぼくたち町のたんけんたい」

昔からある商店街や駅周辺を、どんな店があるか、置いてある品物は何かなどを見て回った。店の人の協力により、聞き取りがしっかりと



【まちたんけん】

き、子どもたちの新しい発見が多かった。探検では、安全のため、保護者ボランティアの方に立ってもらい、見守っていただいた。

商店街や町の施設についての発表会を行い、お世話になった商店街の方へお礼の手紙を届けた。また、お礼の手紙だけでなく、2年生の花壇で育てていたサツマイモのツルで編んだリースも、プレゼントした。店の人がその場で封筒を開いて手紙を読み上げ、「手紙

をくれてありがとう」と直接声をかけてもらえ、感激していた。また、すぐに入り口にリースを吊してくれた店もあり、子どもたちは、自分たちの活動に対する達成感を味わうことができた。



【お礼の手紙とリース渡し】

(2) 第4学年の実践「環境にやさしい町づくり」

ア 「生活を見つめ直そう！ゴミ・水調査隊」

社会科のゴミ調べ、水調べをもとにした学習をもとに学習を深めた。ゴミの学習では、地域のごみ処理工場を見学し、ごみの処理だけでなく、ゴミをさらにリサイクルする方法や、環境を大切にしたい工場の仕組みについて学んだ。また、水調べでは、下水処理場の方を講師に招き、下水処理場の仕組みについて学んだ。下水処理には、特別な薬品できれいにしているのではなく、自然界にいる微生物を使ってきれいにしていることを顕微鏡を使って、実際に見せていただいた。また、パックテストをして、水の汚れ調べを行った。醤油や牛乳など、家庭によくあるものでも水を汚していることを知り、ゴミ処理に対して気を付ける意識が高まった。



【下水道出張講座】

イ 「環境にやさしい町・甚目寺エコチャレンジャー！」

学校で毎月行っているアルミ缶・ペットボトルキャップ回収や、地域の河川の水質調査、グリーンカーテンでの温暖化防止への効果や環境にやさしい住宅環境など、さまざまな学習を行った。そこで、知ったこと、考えたことをもとに、地域とどのようにつながっていくかを考えさせ、話し合った。発表会では、調べたり実験したりして分かったことから、地域・地球が持続可能な発展をするために必要なことを地域の方々に発信した。



【総合学習発表会で発信】

(3) 第5学年の実践「われら産業調査隊」

ア 「甚目寺の伝統産業を知ろう」「甚目寺の主な産業を知ろう」

はじめに、「ふるさと甚目寺」の産業を学習するためのきっかけづくりとして、地域の伝統産業である刷毛産業の出前授業を計画した。この学



【出前授業】

習で、甚目寺の刷毛は日本を代表する産地だということ、刷毛産業が外国製品の台頭により厳しい状況にあることを学んだ。そして、甚目寺の主な産業について資料で調べ学習をした。その後調べ学習では調べきれなかった「人の思い」に着目し、各産業に関わる人たちの仕事に対する思いを意識しながら、地元企業の工場、商店街の商店、JAや甚目寺特産の小松菜を栽培する農家の取材に出かけた。取材活動を通して、子どもたちは、見て、感じて、かわるという貴重な体験をするとともに、働く方の仕事に携わる情熱や思い、苦労や喜びを肌で感じ取ることができた。

イ 「甚目寺の産業を応援しよう」

これまでの取組を振り返る活動では、自分たちも地域の一員として、地域の産業の発展のために何かできることはないかを考えた。2月には毎月12日に、甚目寺観音の境内で行われている「甚目寺観音でづくり朝市」に甚小5年生の店「じもさん」を出店をして、甚目寺の産業を地域の人々に知ってもらい、甚目寺の産業を応援することにした。具体的には、幻の大根である方領大根や小松菜、学校の庭木から収穫したレモンや金柑、子どもたちの手作り手芸品などを販売したり、甚目寺の産業についてまとめた資料の展示を通して、地域の人に甚目寺の産業を発信したりしようということになった。また、宣伝用のPRポスターやチラシを作り、全家庭に配布し、朝市当日の協力をお願いした。朝市では、たくさんのお客様を迎えることができ、子どもたちの威勢のよい掛け声に対して、温かい言葉もかけていただいた。物を売る楽しさと共に、その大変さを味わいながら、地域の方たちとの触れ合いをしっかりと感じる1日となった。また、地域の産業をPRするよい機会となった。



【てづくり朝市】

(4) 第6学年の実践「われら歴史・文化調査隊」

ア 見て、聞いて、触れて、甚目寺 ～甚目寺の歴史・文化を知らう～

地域の歴史に詳しい方を講師に迎え、甚目寺の史実、遺跡、偉人についての概略を学んだ。甚目寺から弥生時代中期の遺跡が発掘されていること、甚目寺小学校に隣接する甚目寺観音を中心として鎌倉時代や安土・桃山時代に、甚目寺が大いに繁栄したことを知った。また、3年前名古屋博物館で開かれた甚目寺観音展の話題から、甚目寺観音の文化財の中でも、愛染明王の中から見つかった胎内仏や解体修理して分かった仁王像の奉納者などの話も聞くことができた。また、古墳～飛鳥時代の出土品を実際に手にとったり、数多くの寺社が並ぶ鎌倉街道に伝わる昔話を聞いたり、全国で唯一の漬け物の神様が祀られている萱津神社についての話を聞いたりした。児童からは「自分のふるさとに長い歴史があることを知って驚いた」「いつも通学路で通っている甚目寺観音が昔賑わっていたことを初めて知った」「まだ甚目寺には知らない歴史がありそう」との声が出た。

そこで、ふるさとの歴史・文化について学習をより深めるために、子どもたちの意見から生まれた「甚目寺観音」「萱津神社と香の物祭り」「鎌倉街道」「遺跡」「甚目寺説教源氏節」「ハンセン病と小笠原博士」の六つのテーマを設け、その中から一つを選択し、グループを組織した。夏休みにはそれぞれのグループごとに取材を行った。甚目寺観音班は、普段は滅多に見られない本堂の内部の貴重な像を見ることができた。萱津神社班は、香の物祭りに参加し、実際につけものを漬ける体験ができた。鎌倉街道班は、自転車で数多くある寺社を回り、重点的に調べたい寺社を細かく取材



【香の物祭りに参加】

した。子どもたちは取材活動が終わっても、現地に行き自主的に調べ活動を行うなどとても意欲的であった。

イ われら甚目寺ボランティア隊！

学んだことを生かして何か地域のためにできることはないかを考えた。ウェビングマップやKJ法の手法を活用して、たくさんのアイデアを出し合った。身近なこととして、地域清掃が取り上げられ、実行に移

すこととなった。

マラソン大会の前日に、コースとなっている校外を歩いてまわり、地域清掃を行った。また、2月3日の甚目寺観音節分会に向けて、



【甚目寺観音の清掃】

甚目寺観音境内や本堂をきれいに掃除することとなった。節分会当日は、6年生がオープニングを飾らせてもらい、節分に参加



【節分会に参加】

することができた。このような活動の中で、地域の歴史の深さや価値を実感し、「ふるさと甚目寺」を大切に思う気持ちがより深まったのではないかと考える。

4 成果と課題

(1) 成果

E S Dの視点を取り入れて、生活科・総合的な学習の時間を進めていく中で、これまでの実践を見直し、整理し、個々のとりくみを体系的にとらえることができた。また、単発の活動でなく、学んだことをふまえて地域を見つめ直すことで、自分の考えをもち、進んで地域と「かかわり」、思いや考えを「つたえよう」とし、ふるさととしてこの地域と「つながって」いこうとする子どもが増えた。

(2) 課題

学年によっては、活動内容から地域とつながる活動が難しい場合がある。子どもの考えや、地域の願いを聞きながら進めていきたい。今後は、年間を通して取り組んだことがどのような変容をもたらすか、アンケート結果を分析し、取組内容を改善していく必要があると考える。また、小学校6年間を通してどのような子どもを育てていくかを学校で一体となって考え、年度ごとに0からスタートするのではなく、培った力を積み上げていくことが大事であると考え。

最後に、学習を通して甚目寺を誇りに思い、将来の担い手としての意識は高まってきている。小学校を卒業しても、自らがふるさとを見つめ、問題意識をもち、ふるさとのために意欲的に活動できる一人の人間に育ってくれることを願っている。